

論文の内容の要旨

論文題目 ブルガリアの都市と交易に関する史的研究：
 19世紀ブルガリア正教徒商人を中心に

氏 名 早坂 由美子

序章

本論文は、ブルガリアの19世紀における都市空間を交易という観点から捉えることを目的とするものである。特に、19世紀中葉におけるブルガリア正教徒商人の交易活動をとおしてみえる交易空間としての都市を描き出すことに重点をおき、個々の商業施設から広域の交易圏までをその関係性の中で捉えていく試みである。

序章では、交易という枠組みを19世紀ブルガリアの都市史研究に用いる意義と当時の交易の主役であったブルガリア正教徒商人について解説を行っている。バルカン半島とブルガリアという研究対象地域については、ヨーロッパとイスラームという東西文明の境界域という地理的位置から歴史的経緯と文化的特質を説明している。これまでのブルガリアにおける建築史学からの都市史研究、都市史研究におけるブルガリアという対象地の意義、本論文で用いる主要史料に関しても解説をしている。

第一章

第一章は、第二章以降で検討する19世紀のブルガリア正教徒商人が主たる交易の場としたブルガリア平野部の都市における19世紀の都市構造と交易・商業空間の実態を明らかにすることを目的として、ソフィアとタルノヴォという当時の代表的な北部ブルガリアの二都市を事例としてとりあげ、分析・考察している。ブルガリアの都市史において、平野部の都市はオスマン帝国統治時代におけるムスリムの入植、および都市空間におけるイスラーム化の経験から純粋なブルガリアの都市とはみなされず、研究が進んでこなかったという事情がある。本章では、オスマン帝国統治時代に主眼を置き、歴史の重層性という視角から、絵図を主要分析史料とした都市形成過程の解明と19世紀の都市構造および交易・商業空間の分析を行っている。

ソフィアとタルノヴォの各都市について、古代・中世における都市の起源、オスマン帝国によるそれらの継承、オスマン帝国統治時代の都市の開発・発展、宗教徒別のマハラ（一つの宗教施設を核とした複数街区から成る行政単位、地区）の形成、19世紀の状況を時系列的に追ひ、ブルガリア都市の都市形成の一端を明らかにしている。第二章以降の議論を深めるために、19世紀の中心商業地区についてはより詳細な分析を行っている。これらの分析からは、オスマン帝国統治時代に培われた平野部の都市における交易・商業空間のイスラーム性、都市における隊商路と商業地区との近接性、19世紀における各交易・商業施設の小型化、陸路交易・ドナウ川交易と各都市の盛衰との関係性などを見出すことができる。また、19世紀ブルガリアの交易・商業空間構成要素であるベジステン、ハン、マアザ、デュキャン、チャルシヤ、パザルという個々の建築的空間に関して概念整理と建築的定義を行っている。

第二章

第二章では、第一章で事例とした都市タルノヴォに本拠地を置いた「ニコラ・ミンチョオル&エフスタティ・セルヴェリ商会」の文書史料に基づいて、19世紀中葉のブルガリア正教徒商人が築いた交易回路について地理的・空間的に考察している。

最初に、歴史の中におけるブルガリア正教徒商人という存在について、オスマン帝国の社会的状況、ブルガリア正教徒社会における地位、ムスリム商人とブルガリア正教徒商人との関係性という側面から検討し、定義を試みた。その結果、ブルガリア正教徒の富裕商人は、オスマン帝国下で形成されたブルガリア正教徒社会において上流層を構成しており、地元の名士という側面を持ち、複数の名前と言語を巧みに使い分けて長距離交易に携わっており、19世紀のブルガリアにおいてはムスリム商人よりも優位に立っていたであろうことが明らかになった。

次に、ブルガリア正教徒商人の一事例として、ミンチョオル&セルヴェリ商会をとりあげ、商会の主要構成員であったラデュヴィチュの帳簿・書簡を用いて、中欧のウィーンからオスマン帝国のイスタンブルにいたる広域交易圏・ネットワーク形成の手法・過程を明らかにした。同商会は1840年代から隆盛したドナウ交易の潮流にのる形で、タルノヴォの他、三つのドナウ商港都市にハンやマアザを賃貸するという手段で交易拠点を形成していき、商会が事業を拡大する1850年代中頃以降はウィーンとイスタンブルへの商会構成員の移住を行い、中欧—オスマン帝国交易の広域ネットワークを形成した。商品輸送は外部の運送業者に委託していたが、バルカン半島南部で開催される各大市への参加、複数都市における信用売り分の代金徴収、各拠点の巡回

は商会構成員によって行われていた。

以上の分析から、ブルガリア正教徒商人が移住をともなう拠点形成、外部輸送手段の利用、拠点巡回における構成員自身の移動という手段により、物流の量と速度に対応した交易回路を構築・維持していたことが判明した。

第三章

第三章では、第二章に引き続きミンチョオル&セルヴェリ商会を事例として、商会が本拠地とした都市タルノヴォにおける交易・商業施設の建設・所有と宗教施設建設への寄進という二つの事柄について、文書・絵図史料から分析・考察を行っている。第二章では広域かつマクロな交易空間について交易回路をたどる形で解明を試みているが、本章ではよりミクロな交易空間として、個々の商業施設を分析対象とし、物理的空間に関する建築的分析と空間利用に関する社会史的分析の組合せによりアプローチしている。

ミンチョオル&セルヴェリ商会がタルノヴォに建設あるいは所有していた交易・商業施設を現存する建築物と文書・絵図史料から探し出した結果、少なくともタルノヴォの商業地区にハン（隊商施設）、マアザ（商業用の倉庫兼事務所）、デュキャン（店舗・工房）を所有していたことが判明し、それらの位置の特定を行った。ハンについては実測調査により図面を作成し、建築的特徴について分析したうえで、房室の賃貸状況や市としての機能を文書史料から明らかにした。マアザについても空間、機能、利用の面から分析し、デュキャンについては買収文書の分析を行った。これらの商会所有の商業施設のうち、特にハンは市場という公益性を持つ商いの場であり、19世紀においてブルガリア正教徒の一商会がこのような公的取引空間を作りだしていることは注目される。ミンチョオル&セルヴェリ商会の事例からは、一連の交易・商業施設建設活動が19世紀中葉のタルノヴォにおける取引ネットワークと各都市の商業地区の形成・維持の一翼を担っていたと考えることができる。

また、宗教施設建設への寄進については、文書史料の分析から商会の中心人物であるミンチョオルがタルノヴォやその近郊のブルガリア正教会の教会、修道院の建設に資金援助を行っていたことが明らかになる。これは地元の名士という社会的側面を反映した行為であり、このような社会的側面からもミンチョオル&セルヴェリ商会とタルノヴォとの関係について考察を行っている。

第四章

第四章では、タルノヴォ近郊のアルバナシという村に本家を構えた 19 世紀のブルガリア正教徒商人一族であるルソヴィチュ兄弟商會を事例としてあつかっている。本章は、ブルガリア正教徒商人が本拠地を都市あるいは村に構えることの違いは何かという疑問を解明するための試みであり、ルソヴィチュ兄弟商會の交易活動とアルバナシという村の空間および歴史的・文化的経緯の両面から分析・考察を行っている。

ルソヴィチュ兄弟商會の文書史料からは、ミンチョオル&セルヴェリ商會と同様の手法でオスマン帝国内外における交易ネットワーク・拠点を形成した事実を知ることができ、その範囲がイスタンブルからプラハにまで広がっていたことが明らかになる。その点においては一般的なブルガリア正教徒商人であるが、取引内容を記した文書史料からはアルバナシに交易拠点を持たないことも同時に判明し、アルバナシが彼らにとってあくまで本家の役割しか持たなかった事実が浮かび上がる。

アルバナシの歴史的・文化的経緯に関しては、既往研究と文書史料の分析から、村が約 300 年間にわたってリュステム・パシャのワクフであったこと、19 世紀末にいたるまでギリシャ文化が保持されていたことが明らかになり、特権的な地位にあったことが推察された。

空間分析に関しては、正教徒商人の屋敷を中心に図面資料から分析を行った。アルバナシに残る正教徒商人の屋敷群がブルガリアの同時代の民家建築に比して閉鎖的な空間構成を持つこと、アルバナシが隊商施設などの交易・商業施設を持たないことから、ブルガリア正教徒商人の富の保管庫としての村であったと結論付けた。

終章

終章では、各章の議論をふまえたうえで、19 世紀のブルガリア正教徒商人にとっての交易・商業空間を移動と越境の空間と位置づけて論じている。19 世紀ブルガリアの交易・商業空間については、オスマン帝国古典期に形成された商業地区・施設が伝統のうちに組み込まれ、19 世紀まで継続し、イスラームの系譜に属する都市空間がブルガリア正教徒商人にも常識的に受容されていたと考察できる。また、移動を前提とした正教徒商人が交易・商業施設において形態よりも機能とその場への適応を重要視したことは、流動性の高いブルガリアの社会において人々が移動・移住先の文化を受け入れる形で都市・村落空間の伝統を構築・保持していったことの一つのあらわれであると考えられる。